

劉禹錫「泰娘歌」をめぐって(上)

山本敏雄
Toshio YAMAMOTO

国語教育講座

はじめに

劉禹錫はその官僚としての時間の多くを京師以外の地で司馬, 或いは刺史として過ごした。科挙に合格した後順風満帆であったが, 永貞の改革が失敗に終わった後, 王叔文を中心とする党派, 所謂「二王八司馬」のひとりとして朗州の地に左遷された。永貞元年(805)である。朗州司馬の任に十年在った後, 長安に戻るが, 入れ替わるように白居易が元和十年(815), 江州司馬に左遷される。

白居易は江州司馬となった翌年, 「琵琶行」を作っているが, 劉禹錫も朗州司馬の任に在った時に, 「泰娘歌」という, 不幸な境遇にある女性の琵琶奏者のことを詩に詠っている。

劉禹錫と白居易の二つの作品は左遷された地において, 同じく不幸な生涯をたどった女性の琵琶奏者に同情を覚え, そこに自らの境遇を重ねるといふ大枠では類似した部分を持っているが, もう一步踏み込んでみた場合, それぞれの詩の特徴が見えてくるのではないか。

本稿では, 「琵琶行」に先行する作品としての劉禹錫「泰娘歌」について, 「琵琶行」との比較を交えながら, また「泰娘歌」を踏まえているともいわれる杜牧の「杜秋娘詩」も視野に入れつつ, 分析を試みてみたい。

本稿中の劉禹錫詩の引用は, 断りのない限り, 瞿蛩園『劉禹錫集箋證』(上海古籍出版社, 1989, 以下瞿本と称す)による。本稿中に挙げた作品の巻数も同書による。また, 詩の制作年と年譜については, 主として蔣維崧等箋注『劉禹錫詩集編年箋注』(山東大学出版社, 1997, 以下蔣本と称す), 陶敏, 陶紅雨校注『劉禹錫全集編年校注』(岳麓書社, 2003, 以下陶本と称す), 高志忠校注『劉禹錫詩編年校注』(黑龍江人民出版社, 2005, 以下高本と称す), 『劉禹錫集箋證』付録の「劉禹錫集傳」, 羅聯添「劉夢得年譜」(『唐代詩文六家年譜』所収, 学海出版社, 1986)を参照した。

一, 制作時期について

制作時期については, 「琵琶行」は白居易が江州司馬に赴任した元和十年(815)の翌年, 元和十一年とされる(朱金城『白居易集箋校』巻十二)¹。一方, 「泰

娘歌」については, 瞿本は「此詩自是在朗州時作」というだけであるが, 蔣本では「詩当作在朗州司馬任後期」とする。陶本は元和八年頃, 高本は元和六年から劉禹錫が都に戻った元和九年の間とする。陶本, 高本は「張憇爲將作少監, 元和五年貶爲朗州長史」(『冊府元龜』巻七「郡守部 貪黷」)という記事を根拠として制作時期を限っているが, この記事についてはまた後で触れる。この四つのテキストの説によれば, おおよそ元和六年から九年の間と見てよいであろう。

以上の点から見て, 劉禹錫の「泰娘歌」が白居易の「琵琶行」に先行する作品であることはほぼ間違いない。なお, 杜牧の「杜秋娘詩」は大和七年(833)とされている。当然, 劉禹錫と白居易の作品を眼にした可能性は高い。

二, 「泰娘歌」序文について

「泰娘歌」, 「琵琶行」, 「杜秋娘詩」にはそれぞれ序文が付されている。長編詩の序文というのは詩によって意味合いは異なるであろうが, 詩作の動機, 経緯, 詠われる内容についての簡単な説明などが示されるのが普通である。そこでは詩人の創作の意図, 姿勢をある程度読み取ることが可能であろう。中国の伝統的な詩における序文の意味合いについて, 文学史的意義を検討するというのも重要と思われるが, ここでは三首の詩の序文を吟味することで, それぞれの詩人の詩作態度や詩の特徴が幾分かは見えてくるのではないかという予測の下, まず, 「泰娘歌」の序文について検討してみたい。

「泰娘歌」の序文には泰娘の経歴が簡略に述べられている。全文を挙げる。

泰娘本韋尚書家主謳者。初尚書爲吳郡得之, 命樂工誨之琵琶, 使之歌且舞。無幾何, 盡得其術。居一二歲, 攜之以歸京師。京師多新聲善工, 於是又捐去故伎, 以新聲度曲。而泰娘名字往往見稱於貴遊之間。元和初, 尚書薨於東京, 泰娘出居民間。久之爲蕪州刺史張憇所得。其後憇坐事謫居武陵郡。憇卒, 泰娘無所歸。地荒且遠, 無有能知其容與藝者。故日抱樂器而哭, 其音憔悴以悲。雜客聞之, 爲歌其事, 以足乎樂府云。

泰娘は本と韋尚書の家に謳を主る者なり。初め尚書吳

郡爲りしとき之れを得、樂工に命じて之れに琵琶を誨へ、之れをして歌ひ且つ舞はしむ。幾何も無くして、盡く其の術を得たり。居ること一二歳、之れを携へて以て京師に歸る。京師に新聲、善工多し。是に於て又故伎を捐て去り、新聲の度曲を以てす。而して泰娘の名字、往往貴遊の間に稱せらる。元和の初め、尚書東京に薨じ、泰娘出でて民間に居る。久しうして蘄州刺史張憇の得る所と爲る。其の後、憇事に坐して武陵郡に謫居す。憇の卒するや、泰娘歸する所無し。地荒れて且つ遠く、能く其の容と藝とを知る者有る無し。故に日々樂器を抱きて哭き、其の音焦殺、以て悲し。雜客之を聞き、爲に其の事を歌ひ、以て樂府に足さんとしか云ふ。

この序文には泰娘を家妓として養った二人の人物、韋尚書（韋夏卿）、張憇が登場する。二人についてはそれほど詳しい伝記がわかっているわけではないが、注釈書に引かれている資料などを頼りに、劉禹錫との関係、またその周辺の人々のことも含めて、おおよそのところを辿ってみたい。

まず、韋夏卿である。『舊唐書』卷一六五、『新唐書』卷一六二に伝があり、それらによれば、大曆中に制挙に応じ²、京兆府高陵県主簿に始まり、同じく京兆府奉天県令、吏部員外郎などを経て、常州刺史、蘇州刺史に出、貞元末、徐泗行軍司馬となり、吏部侍郎、京兆尹、太子賓客、檢校工部尚書、東部留守、太子少保を歴任し、元和元年三月に六十四歳で没した。死後、尚書左僕射を贈られている³。

その人物については、「有風韻，善談讌，與人同處終年，而喜愠不形於色（『舊唐書』）」、「性通簡，好古，有遠韻，談說多聞。……雖同遊，終年不見其喜愠（『新唐書』）」などとあり、よく人と交わり、物事に拘らず、穏やかな人柄であったことが窺える。また、「傾心辟士，頗得才彦，其後多至卿相，世謂之知人（『舊唐書』）」、「所辟士如路隋，張賈，李景儉等，至宰相達官，故世稱知人」（『新唐書』）」と、後に宰相になるような器の人物を見いだす眼を持っていたことが評価されていた⁴。

後者については上に挙げた人物以外にも、李紳や元稹を挙げることができる。李紳は科挙に及第する以前より詩に優れていることで有名であったが、蘇州刺史であった韋夏卿がしばしばこれを称賛したことが『新唐書』卷一八一の李紳の伝に見える⁵。また、李紳自身の詩でも貞元中に韋夏卿の知遇を得たことに触れている⁶。元稹については、科挙に及第して間もない頃に、韋夏卿が末娘を嫁がせたことが知られている⁷。これもその人物を評価してのことであろう。

次に、韋夏卿と劉禹錫との接点について見てみたい。

韋夏卿は貞元十七年十月、吏部侍郎から京兆尹となった。同十八年三月に李実が京兆尹となっており、

それまでの期間京兆尹の任にあったと考えられる（『舊唐書』卷十三、徳宗本紀下）。一方、劉禹錫は貞元十八年に京兆渭南県主簿となり、翌年監察御史に移っている⁸。この間に、韋夏卿のために八編の文章を草している⁹。劉禹錫が渭南県主簿の任にあったとき、おそらく親交はあったと考えて間違いのないであろう。これ以前、韋夏卿が常州刺史、蘇州刺史であった時代に既に知り合っていた可能性を述べるものもあるが、これについては断定的なことを言うことは難しい¹⁰。

間接的な接点という点から考えると、韋夏卿と関係の深い人物で劉禹錫とも友人であった人物がいる。先に挙げた元稹である。瞿蛻園は劉禹錫が元稹と知り合ったのは白居易と知り合うより前で、元稹が秘書省校書郎を授かり、劉禹錫が渭南県主簿から監察御史に移った貞元十九年（803）頃ではないかとしている¹¹。卞孝萱も貞元十九年の条で「（元稹）識劉禹錫，柳宗元，約在本年前後」とする¹²。貞元十九年というこの年は、元稹が韋夏卿の末娘韋叢と結婚した年でもある¹³。年譜によれば、この年の十月、韋夏卿は東部留守となって洛陽に向かうが、元稹は妻とともに従った¹⁴。「陪章尚書丈歸履信宅，因贈韋氏兄弟（『元稹集』卷十七）」と題する詩はこの時の作とされるが、この洛陽の履信坊にあった韋夏卿の宅での宴会の様子が元稹の別の詩に見える。そこに泰娘の姿もあったと考えることは的外れではなかろう¹⁵。「泰娘歌」にも韋夏卿の死後の泰娘の生活を詠う部分で「洛陽舊宅生草萊」の句が見えることから、劉禹錫自身もそのことは意識していたのであろうと思われる。この時期に元稹から劉禹錫に泰娘に関する何らかの情報がもたらされた可能性もある。

また、先に挙げた韋夏卿が眼をかけていた人物の中では、衛中行は劉禹錫と同年の進士（『登科記考』卷十三）であり、劉禹錫は張賈、李景儉、段平仲等と詩のやり取りがあったり、また彼らのことを詩に詠ったりしている¹⁶。ただ、劉禹錫と彼らとの交遊が韋夏卿と通してのものかという点、そのように断定する資料は見出しがたい。

少し視点を変えて見ると、劉禹錫と韋夏卿の接点となる人物として、「二王八司馬」のひとり、韋執誼を挙げることができる。永貞の改革の主要人物であったが、彼は韋夏卿の従弟であり、『元和姓纂』（卷二、京兆諸房韋氏）によれば、韋執誼の曾祖父である韋会は韋夏卿の曾祖父韋弼の兄であった。劉禹錫が韋執誼を通して韋夏卿と面識があった可能性は大いにある。劉禹錫が朗州に左遷される以前に上に挙げたような人々から、あるいは直接韋夏卿宅で、泰娘を見かけたり、彼女についての話を聞いたりしたと推測することはできよう。

最後に、韋夏卿が眼をかけた人々と永貞の改革に関して触れておく。

永貞の改革の中心人物であった王叔文が最も重く用いたのは李景儉と呂温であると史書には記されている¹⁷。李景儉は韋夏卿が東都留守であった時期(貞元十九年(803)から永貞元年(805)十二月)に召されて従事となっている。呂温は韋夏卿から評価されたという記事はないが、注3に挙げた「神道碑」を韋夏卿のために書いている。永貞の政変に際しては、李景儉は母の喪に服しており、呂温は吐蕃に使者として出向いていたために連座を免れている。

劉禹錫が李景儉に詩を贈っていることは述べたが、呂温にも詩を三首贈っている¹⁸。また「唐故衡州刺史呂君集紀」(巻十九)という文章を残しており、呂温のために彼の文集を編集したことがわかる。

また柳宗元と韋夏卿の関係を示す資料は少ないが、柳宗元は、「爲韋京兆祭杜河中文」(『全唐文』巻五九三)、「爲韋京兆祭太常崔少卿文」(『全唐文』巻五九三)という二篇の文章を韋夏卿のために草している。韋夏卿が京兆尹であったのは貞元十七年から十八年の間であり、柳宗元は、貞元十七年に集賢殿正字から藍田県尉に移っている。そして貞元十九年に劉禹錫とともに監察御史となる¹⁹。藍田県は劉禹錫が主簿を務めていた渭南県と同様京兆府に属する畿県である。二篇の文章はこの職にあったときに書かれたものであろう。

このように見てくると、韋夏卿は永貞の改革における王叔文の党派と近い関係にあったようである。永貞の改革における韋夏卿の立場はよくわからないが、人間関係から言えば、王叔文派に近いといえよう。元和元年に亡くなったこともあり、この政変に関わって韋夏卿について語られた記事は見あたらない。韋夏卿の周辺の人々、泰娘を遠く取り巻く人々の間に永貞の政変によって左遷、あるいは失意を味わった人々が多かったことに気づかざるをえない。

劉禹錫からすれば、韋夏卿は上司でもあり、政治的な考えにおいても同志であった韋執誼の従兄でもあった。また、彼は韋夏卿が評価した人物たちとも少なからず政治信条を同じくし、交流もあった。「泰娘歌」はそのように詩人からは比較的近い世界に生活していた女性を詠った詩であると言える。

上に挙げたような人々を通して劉禹錫が泰娘についての情報を得ていた可能性は否定できないであろう。更に想像を逞しくすれば、実際に泰娘の演奏を耳にした可能性もあったのではなかろうか。

張恣については記事は少なく、序文の記載に関わるものとしては、先にも挙げた『冊府元龜』のみである。

その人物像については、「有李元平、陶公達、張恣、劉承誠、皆言談詭妄、誇大可立功名、亦有微材薄藝」(『舊唐書』巻一三「關播傳」)、「時李元平、陶公達、張恣、劉承誠率輕薄子、游播門下、能侈言誕計、以功名自喜」(『新唐書』巻一五一、「關播傳」)というような記述に見られるように、才能がないのに大言壮語し、

功名を得ることだけに執着する軽薄な人物であったとされている。『舊唐書』によれば、關播は天宝末の進士で、貞元十三年に七十九歳で亡くなっている。上に挙げた張恣に纏わる記事は建中年間から貞元初めにかけてのことと思われる。

『唐刺史考全編』によれば、張恣は貞元三年(787)には江南東道漳州刺史(福建省)の任にあった。貞元七年頃には嶺南道昭州刺史(広西壮族自治区)、永貞元年(805)には山南西道通州刺史(四川省)、元和二年(807)頃から元和四年にかけては淮南道蕪州刺史(湖北省)の任にそれぞれあった。その後長史として朗州にやって来たということになる。

『冊府元龜』の「張恣爲將作少監、元和五年貶爲朗州長史」という記事については、職名の「朗州長史」という点に疑問が残る。『舊唐書』、『新唐書』、『唐六典』によれば、朗州は下州であり、上州、中州には長史という官はあるが、下州には刺史の下に別駕は置すが、長史は置かない²⁰。ただ、天宝八載(749)八月二十六日の勅で「下州置長史一員」(『唐會要』巻六十九、別駕)とされているので、そのような認識があったのか、また別駕と長史については存廃が頻繁であったため、混乱があるのかもしれない²¹。今のところは、別駕と同じものと理解しておく。

この元和五年というのは劉禹錫が朗州司馬に赴任してから五年後のことである。朗州司馬の職にあった十年のほぼ中間の時期である。長史が別駕を指しているとする、張恣は亡くなるまでの間劉禹錫の直属の上司であったことになる²²。

以上のように、韋夏卿、張恣ともに官吏としては劉禹錫の直属の上級職に在職したことのある人物であった。序文に述べられている通りだとすれば、劉禹錫が渭南県主簿であった当時の京兆尹韋夏卿の家妓泰娘が、およそ八年後、劉禹錫が左遷されていた朗州の地に長史として赴任してきた張恣に付き従ってやって来たのである。まして、先に述べたように長安時代、劉禹錫が泰娘を見知っていた可能性が高いとなれば、奇遇というほかはない。朗州において劉禹錫と奇遇ともいえる出会いをした女性として泰娘は提示されていると言える。朗州でのこの出会いが「泰娘歌」を作る動機の一つであったのではないか。

この偶然とも言える出会いは二人の人生における地理的な移動のという面でも重なりを見せることにつながっている。序文によれば、泰娘は「吳郡」(蘇州)で韋夏卿に見いだされた。其の後長安へ行き、また張恣に従って朗州へと居を移している。最終の地朗州では庇護者であった張恣に先立たれ、寄る辺ない身となっていたのである。

一方、劉禹錫は蘇州嘉興県に生まれ、幼少の頃を江南の地で過ごしている。貞元九年(793)に二十二歳で進士に及第した後は、父の喪に服したり、淮南節度

使杜佑の幕下にあった時期(貞元十六、十七年)もあったが、貞元十八年(802)に渭南県主簿の地位に就いてからは、永貞元年(805)に朗州に左遷されるまでは長安で過ごしている。長安にあった時期は、泰娘にとって「泰娘名字往往見稱於貴遊之間」という晴れがましい時期であったのと呼応するように、劉禹錫にとっても希望に溢れた時期であったろう。その後、五年のずれはあるものの、ともに朗州の地へと向かうことになったのである。この蘇州から長安へ、そして朗州へという共通した道筋は、劉禹錫が泰娘の境涯の上に自己の境涯を重ね合わせるとき、より強く共感を覚えることとなったであろう。

家妓であった泰娘にとって、「地荒且遠，無有能知其容與藝者」という朗州の地での主人の死は、「日抱樂器而哭，其音憔悴以悲」という悲惨な状況を生み出さずにはおかなかった。長安、洛陽で過ごした日々を取り戻すことは絶望的な状況である。劉禹錫にとってもそれは人ごとではなかった。なぜなら、憲宗は元和元年八月に、「八司馬」については「縦逢恩赦，不在量移之限」(『舊唐書』卷十四，憲宗本紀上)，つまり恩赦があった場合には京師の近くの地に移すという規定をその八人には適用しないとしたからである。白居易の江州司馬への左遷とは重さが異なるのである。

「泰娘歌」においては、登場する不運な妓女はその不運な境涯に対して単に詩人が同情を寄せる対象というだけにとどまらない。朗州における奇遇とも言える出会い、蘇州、長安、朗州と同じ道を辿り、朗州において絶望的とも思える環境を共有しているなど、詩人と妓女の人生は絡み合い重なり合っている。このことが劉禹錫に「泰娘歌」を作らせた大きな理由となっているのではなからうか。泰娘を詠うことはとりもなおさず、劉禹錫自身の人生の悲劇を詠うことでもあったのである。

序文の最後の「雜客聞之，爲歌其事，以足乎樂府云」という部分で、初めて作者の存在が見えてくる。「雜客」は劉禹錫自身のことであるが、ここではあくまでも「樂府」の語り手としてのみ登場する。劉禹錫は韋夏卿、張憇という詩人の身近な人物に仕えた家妓である泰娘の人生遍歴を第三者の立場から語ろうとするのである。

作者劉禹錫の詩作時の不運な境涯の原因となった永貞の政変が、主人公泰娘の不幸の直接の原因ではないが、泰娘の擁護者韋夏卿の周辺に永貞の改革に関与した人物が何人もいたという事実は、詩人の世界と詩に詠われた妓女の世界が重なりを持っていたことを示している。また、詩人と妓女は先に述べたように、朗州に至るまでの道程においても重なりを持っていたことはその二人の世界の重なりをより一層強く示すものである。これは「琵琶行」や「杜秋娘詩」における詩人と妓女の関係とは異なる点である。

三、「琵琶行」序文との比較

以上のような点について、白居易の「琵琶行」ではどうであるのか、その序文について見てみたい²³。

元和十年，予左遷九江郡司馬。明年秋，送客湓浦口。聞舟中夜彈琵琶者，聽其音，錚錚然有京都聲。問其人，本長安倡女，嘗學琵琶於穆曹二善才，年長色衰，委身爲賈人婦。遂命酒，使快彈數曲，曲罷憫默。自敘少小時歡樂事，今漂淪憔悴，轉徙於江湖間。予出官二年，恬然自安，感斯人言，是夕始覺有遷謫意。因爲長句歌以贈之。凡六百一十六言，命曰琵琶行。

元和十年，予九江郡の司馬に左遷せらる。明年秋，客を湓浦口に送る。舟中，夜，琵琶を弾く者を聞き，其の音を聴くに，錚錚然として京都の聲有り。其の人を問へば，本と長安の倡女にして，嘗て琵琶を穆曹二善才に學び，年長じて色衰へ，身を委せて賈人の婦と爲る。遂に酒を命じて，快く數曲を弾か使むるに，曲罷んで憫默たり。自ら少小時の歡樂の事と，今漂淪憔悴して，江湖の間に轉徙することとを叙ぶ。予，出でて官たること二年，恬然として自ら安んずるも，斯の人の言に感じ，是の夕始めて遷謫の意有るを覺ゆ。因りて長句歌を爲りて以て之に贈る。凡そ六百一十六言，命じて琵琶行と曰ふ。

まず、「元和十年，予左遷九江郡司馬」と、ひとつの時点と「左遷」されたという、その時点における作者の政治家としての状況が提示される。「泰娘歌」では作者が語り手として一步退いた位置にあったのと違い、作者が登場し、女性の琵琶奏者と関わっていくことで話が展開していく。作者自らが「琵琶行」という物語の登場人物のひとりであることを宣言している。

女性に関していえば、「聞舟中夜彈琵琶者，聽其音，錚錚然有京都聲」と、まずその奏でる樂器の音が示される。ここで先ず音を示すことでこの詩における琵琶の音の重要性が暗示される。それも「京都聲」なのである。演奏する女性については白居易にとっては未知の存在であり、「本長安倡女，嘗學琵琶於穆曹二善才，年長色衰，委身爲賈人婦」，京師の人間であり，琵琶の演奏に優れていること，零落して商人の妻となっていることが示されるだけで，名前も示されない。泰娘が劉禹錫にとっておそらく既知の存在であり，名前を示された上で韋夏卿，張憇という詩人にとって身近な実在の人物との関係を含めて説明されるのとは異なり，作者と無関係な名前のわからない女性として個別性が薄められている。

この女性は，その演奏する琵琶の音色も含めて，京師のイメージを強く持たされている。具体的な名前を持たないだけよけいに「京都」のイメージだけが強く

印象づけられている。そして、それが零落して天涯の地に居ることが重要なのである。

一方、泰娘はもともと「謳」(うた)を専門とした妓女であった。その後琵琶を学んだが、「吳郡(蘇州)」で学んだもので、韋夏卿とともに長安に行ってから、「京師多新聲善工、於是又捐去故伎、以新聲度曲」、つまり京師でもはやされていた新しい音楽を学び、それまでの「故伎」を捨てたというのである。泰娘の場合、「吳郡」で新たに琵琶を、「京師」では新しい音楽を身に付けることができたという彼女自身の能力の高さに注目された表現になっており、「琵琶行」の女性が京師のイメージを象徴的に示しているのとは異なる。

最後にその女性の話から引き出された作者の「覺有遷謫意」という感慨が示される。左遷されたものの悲しみはこの詩全編の基本的な情調であるが、「泰娘歌」と違って、作者自身の思いを直接示す言葉として呈示される。

このように見てくると、「泰娘歌」と「琵琶行」というのは、序文を見ただけでも、大枠の類似性にもかかわらず、詩人の立場、女性や琵琶についての表現態度はかなり異なる。

この違いは端的に言って詩題にも現れている。「泰娘歌」は「泰娘」という女性のことを詠う「歌」であり、「琵琶行」はあくまでも「琵琶」という楽器にまつわる「行」(うた)なのである。

さらに、この二つの作品には、「琵琶行」が白居易詩の四分類のうち「感傷詩」におかれているのに対し、「泰娘歌」は序文で「足乎樂府」というように、劉禹錫は樂府詩と意識している、という違いも存する。

序文だけではなく、詩全体に関わる話題であるが、ここで簡単に触れておく。

「感傷詩」は「有事物牽於外、情理動於内、隨感遇而形於歎詠者一百首、謂之感傷詩(事物の外より牽き、情理の内に動き、感遇に随ひて歎詠に形わるる者一百首有り、之を感傷詩と謂ふ)」、「與元九書」『白居易集箋校』巻四十五)と白居易自身は定義している。これは「毛詩大序」の「情動於中而形於言(情中に動き、言に形わる)」という詩という文芸の発生の原理を示す考えを踏まえたもので、中国伝統詩の本来のあり方に則ったものと言えよう。また、白居易の感傷詩においては、「感じたことをそのまま表出して、思想による抑制や方向付けを受けることが少な」く、「都や官職への思い、即ち煩惱が率直に顔を出している」とされる。²⁴ 序文中の「感斯人言、是夕始覺有遷謫意」はまさに「琵琶行」が感傷詩の典型的な存在であることを説明しているといえよう。

上に挙げた「毛詩大序」と同様の表現は『禮記』樂記では「凡音之起、由人心生也。人心之動、物使之然也。感於物而動、故形於聲(凡そ音の起こるや、人の

心より生ずるなり。人の心の動くや、物之れをして然ら使むるなり。物に感じて動く、故に聲に形わる)」、「樂者、音之所由生也。其本在人心之感於物也(樂は、音の由りて生ずる所なり。其の本 人の心の物に感ずるに在るなり)」などと音楽の発生原理を説明する表現としても見える。このような伝統的な音楽観、文学観に即して言えば、外界の事物や環境によって引き起こされた女性の思いが、琵琶の音となって表現され、その音楽と女性の言葉によってさらに白居易の情が動かされて表出されるというように、「毛詩大序」や「樂記」に示される原理が、「琵琶行」という詩の中では妓女の琵琶の音楽と白居易の詩作においてと二重に構造化されている。これが「琵琶行」の大きな特徴であり、そのことは序文において既に呈示されているのである。

これに対して、劉禹錫の「泰娘歌」では「足乎樂府」、つまり「樂府に付け加える」とある。「泰娘歌」は樂府であると言っているわけである。では劉禹錫の樂府制作の意識とはどのようなものなのだろうか²⁵。これは大きな問題であるが、ここでは、いくつかの樂府に付された序文から劉禹錫の考えを探してみたい。

例えば、朗州司馬時代に作られた「采菱行」(巻二十六)の序では「……古有采菱曲罕傳其詞、故賦之以俟采詩者」とあり、その土地の風俗を詠った詩が記録され広められることを願っている。「采詩者」は当然、伝統的な文学観に基づけば「采詩官」の意味であろうから、中央政府にその詩が認知されることによって、政治的に何らかの作用を及ぼすことを期待していると言ってもよいであろう。そこまで言わずとも、記録されることによってより広範に知られることを意図しているとは言えよう。

連州刺史であった時期(元和十年～元和十五年)に作られた「挿田歌」(巻二十七)の序には「連州城下俯接村墟。偶登郡樓、適有所感、遂書其事爲俚歌、以俟采詩者」とあり、「俚歌」つまり民間の歌謡として広めること、それに「采詩」の者によって収集され、より広く天下に知られることがその目的となっていることがわかる。同じく連州刺史時代の「沓潮歌」(巻二十七)の序では「……因歌之附于南越志」とあり、ここでも少なくとも記録に残そうとする意志が見られる。

その他にも夔州刺史時代(長慶(822)年～長慶四年)に作られた「竹枝詞」(巻二十七)の序では「…昔屈原居沅湘間、其民迎神詞多鄙陋、乃爲作九歌、至于今荆楚鼓舞之。故余亦作竹枝詞九篇、俾善歌者颺之、附于末、後之聆巴歎、知變風之自焉」という。これは屈原が民歌を踏まえて創ったといわれている九歌がいまだに荆楚の地域で歌われていることを意識している。九首という数字が屈原を意識していることをはっきりと示している。そして、自分も「竹枝詞」を

作り、「歌を善くする者をして之を颯げて、末に附せしむ、後の巴歛（巴地方の歌）を聆くもの、變風のごこ自りするを知らん」と、後世まで歌われることを期待している。

このように当地の風俗を詠った楽府については俚歌として歌われ、「采詩者」に取り上げられ、より広く世に迎えられることを意図している。

しかし、「泰娘歌」のような不幸な女性演奏家の境遇を詠う楽府については、趣が違ふこともあり、全く同様のことが言えるかどうか疑問である。今のところは俚歌的要素が少ないことは確かであるが、歌われないまでもこの女性の物語がより広範に認知されることを望んでいたことは間違いなからうと指摘するにとどめておく。

「泰娘歌」序文の「足乎樂府」という言い方については同様の表現が他の詩にも見られる。「淮陰行」五首（巻二十六）序文の「以裨樂府」、「代靖安佳人怨」二首（巻三十）序文の「以裨于樂府」がそれである²⁶。どちらも「樂府を補う」あるいは「樂府に加える」という意味であろう。「淮陰行」は、序によれば、「古樂府「長干行」は「三江」（ここでは長江下流を指すか）のことを詳しく詠っている。淮陰で行く手を風に阻まれたことがあったので、新たに淮陰のことを詠ったこの詩を作って樂府を補う」という。長干は長江近くの地名であるが、それに倣って淮水近くの淮陰のことを詠ったものである。古樂府という伝統的な詩のジャンルに自らの作品をも組み入れようとする、言い方を変えれば、文学的伝統の正統性の中に自らを置こうとする意識を序文からは読み取ることができよう。

「代靖安佳人怨」は、序によれば、元和十年に武元衡が暴漢に襲われて亡くなった事件を聞いて作られたものである。靖安は長安の武元衡宅のあった坊の名で、武元衡ゆかりの女性に代わってその怨みを詠うという形を取っている。詩の中の言葉で言えば、その女性は「昨夜華堂歌舞人」である。序によれば、「遠方の官にあり、身分賤しき故に誄を作ることかなわず²⁷、歌詩を作って悲しげな挽歌に合わせることもできないので佳人怨を作って樂府に加えた」という。個人の徳行を称える誄や葬礼に歌われる挽歌という個別的、制約的なものではなく、より普遍性を持った、庇護者を失った女性の歎きという形、それが樂府という範疇に属することになるのであろう。

「泰娘歌」の「足乎樂府」という表現には、上に見たような歌としての拡がりを求めるということと、伝統的文学の正統性に連なる事への期待が込められているであろう。ここで、樂府というジャンルを考えたときに注意しなければならないのは、その諷諭の精神である。白居易の「新樂府」五十首は元和四年、つまり「泰娘歌」の数年前に作られていることを勸案すれば、劉禹錫が「樂府に付け加える」というとき、「新樂府」

の中心となる諷諭の精神をどこまで意識していたのが問題とならう。

白居易の「新樂府」は李紳の「新題樂府」に和した、元稹の「和李校書新題樂府」十二首に触発されて作られたが、白居易、元稹、李紳と並べてみると、それぞれ劉禹錫と親交があったことは間違いがない。ただし、白居易との晩年の交遊は唱和集もあり、よく知られるところであるが、初めて出会ったのが何時かということについては二人の作品から確定することは難しいとされている²⁸。ただ、朱金城は、白居易が劉禹錫に贈った詩から、元和年間の初めには、面識はなくとも詩文などのやり取りはあったとしている²⁹。

元稹については先に述べたとおり、貞元十九年(803)頃から交流はあったと言われている。李紳との関係についてはよくわからないが、元稹の年譜によれば、元稹と白居易、李紳は元和初めには交流があったようである³⁰。韋夏卿と李紳との関係を考えても、韋夏卿を介して劉禹錫と李紳の間に親交があったと考えることは不自然ではなからう。たとえ、この時期に交流がなかったとしても、元稹、白居易との関係から考えて、彼らの「新樂府」の存在を知っていたと考えられる。ただし、これらは全て状況証拠に過ぎない。樂府詩の諷諭性については、劉禹錫の樂府詩全体を検討する必要がある。それはこの後の課題である。

三、杜牧「杜秋娘詩」序文

次に、劉禹錫の「泰娘歌」がその先駆をなすとされる、杜牧の「杜秋娘詩」の序文を見てみよう。杜牧は「泰娘歌」を読み、これを意識しつつ、「杜秋娘詩」を作ったであろうと言われている³¹。その序文は以下の通りである³²。

杜秋、金陵女也。年十五、爲李錡妾。後錡叛滅、籍之入宮。有寵于景陵。穆宗即位、命秋爲皇子傅姆。皇子壯、封漳王。鄭注用事、誣丞相欲去己者、指王爲根。王被罪廢削。秋因賜歸故郷。予過金陵、感其窮且老、爲之賦詩。

杜秋は金陵の女なり。年十五にして李錡の妾と爲る。後、錡叛滅し、之れを籍して宮に入る。景陵に寵有り。穆宗位に即くや、秋に命じて皇子の傅姆爲らしむ。皇子壯にして漳王に封ぜらる。鄭注事を用ひ、丞相を己を去らんと欲する者なりと誣ひ、王を指して根と爲す。王罪を被り廢削せらる。秋因りて故郷に歸るを賜ふ。予金陵を過ぎり、其の窮し且つ老いたるに感じ、之れが爲に詩を賦す。

李錡は唐の王室につながる人物である³³。徳宗の治世、鎮海軍節度使となり、憲宗の元和二年、謀反し、破れた³⁴。杜秋は後宮に没収されたものの憲宗の寵愛

を受け、憲宗の死後は穆宗の皇子懷懿太子 of 保姆となった。文宗は即位すると、宰相宋申錫と図って宦官王守澄を排除しようと試みたが、逆に王守澄、鄭注らは宋申錫が漳王(もとの懷懿太子)を帝位につけようとしていると讒言し、大和五(831)年に漳王は巢巢公に貶黜された³⁵。これに伴って杜秋も故郷に帰されたのである。

この詩も悲運な運命に弄ばれた妓女 of 物語であるが、序文では杜秋自身の遍歴よりも政治的 event の説明に主眼があるか of ようである。杜秋については名前と出身地が示されるものの、その後は、「年十五、爲李執妾」、「穆宗即位、命秋爲皇子傅姆」、「秋因賜歸故郷」と簡単に動向が示され、最後に「予過金陵、感其窮且老、爲之賦詩」と詩を作った動機が述べられる。「泰娘歌」や「琵琶行」のように、歌や琵琶という妓女 of 技芸に関する部分も序文では描写されない。政治的 event と杜秋の関わりだけが述べられている。

漳王が貶黜されることになったこの事件は、その四年後の大和九年に起こる「甘露の変」の前触れとも言うべき事件であり、この時代における大きな政治事件が杜秋の人生遍歴の背後には存在していたのである。杜牧がこの詩を作ったのは大和七年、三十一歳の時とされており、「甘露の変」の二年前ではあるが、「甘露の変」に至る権力者たちの争いが杜秋の人生を大きく動かしたといえよう。

「泰娘歌」では、韋夏卿の死と張恣の左遷が泰娘の悲運の原因となっており、劉禹錫は政治的 event が介在することには触れない。この詩に関わる政治的 event 大きな事件は詩人自身に降りかかった「永貞の改革」の失敗とそれによる左遷であり、泰娘自身に及ぶものではない。「琵琶行」でもそこに詠われた女性 of 悲劇は明確な形で政治的 event と関連させて説明はされない。この詩においても序文で明示されている政治的 event は武元衡の殺害に端を発する白居易自身の左遷である。三首ともにその背景に、永貞の改革の失敗、武元衡殺害、甘露の変に至る動きなど、当時の重要な政治事件が存在する。しかし、作品との距離はそれぞれ異なる。三首の中では「杜秋娘詩」において序文中に具体的な政治事件が最もはっきりと示され、それが詩の主人公杜秋に深く関わるといふ点が他の二首とは異なる。

また「泰娘歌」、「琵琶行」と違って、詩人自らの不幸な境涯をそこに重ね合わせるという姿勢は杜牧にはないと指摘されている³⁶。そのことは序文についてみれば、劉禹錫にとっての永貞の改革の失敗、白居易における武元衡殺害事件のような詩人自身に関わる政治事件の影が見えず、杜秋に関わる政治事件のみが記され、詩人は客観的に自分とは「殆ど関わりの無い女性」³⁷ of 悲劇を語る位置にあることを示す文章となっていることに現れている。悲運の女性を詠う詩において、関

わり方に差はあるとはいえ、政治的 event が背後に存するという点には注意しておく必要がある。

詩人がそれらの女性について詠うとき、劉禹錫と杜牧は第三者的な語り手 of 位置にあるが、白居易の場合、詩人自身も「琵琶行」という物語の登場人物となり、妓女と同じ場所にあつて、その琵琶や語りを聞くという設定になっていることが、序文からも想像される。この点でいえば、「杜秋娘詩」は「泰娘歌」を受け継ぐものであり、「琵琶行」とは趣を異にする。

以上のいくつかの点はいくまで序文を中心に見た場合である。次の段階として「泰娘歌」の詩そのものを読む必要がある。

平成19年9月18日受理

注

- 白居易の詩については、テキスト、制作年ともに朱金城『白居易集箋校』(上海古籍出版社、1988)に拠る。
- 『登科記考』巻十によれば、大暦二年(767)、茂才異行科に弟の正卿とともに及第している。
- 呂温「故太子少保贈尚書左僕射京兆韋府君神道碑」(『全唐文』巻六三)に「以元和元年三月十二日、薨於東都履信里之私第、享年六十有四、龍贈尚書左僕射」とある。
- 宋、王『唐語林』巻三「識鑑」には「韋獻公夏卿有知人之鑑、人不知也。」とあり、韋夏卿が三人の従弟(韋執誼、韋渠牟、韋丹)に対して彼らの将来を言い当てた話が載せられている。また、『新唐書』と同様の話も載せられているが、路隋等以外に皇甫鎛、段平仲、衛中行、李翱、李詞の名も挙げられている。『唐語林』の記事については既に瞿蛻園に指摘がある。注3に挙げた呂温の文章でもこれらの人々の名前が挙がっているが、李詞ではなく、韋詞となっている。
- 「爲人短小精悍、於詩最有名、時號短李。蘇州刺史韋夏卿數稱之」。なお、韋夏卿が蘇州刺史であったのは、貞元十二年(796)から貞元十六年。(郁賢皓『唐刺史考全編』巻一三九(安徽大学出版社、2000)による。)
- 「過吳門二十四韻」(『全唐詩』巻四七)の原注に「貞元中、余以布衣多游吳郡中。韋夏卿首爲知遇、常陪宴席」とある。同じ詩の後の部分の原注には、「大和七年、余鎮會稽、劉禹錫爲郡」とある。
- 「夫人諱叢、字茂之、姓韋氏。……王考夏卿以太子少保卒贈左僕射。……愛之、選壻得今御史河南元稹。稹時始選校書秘書省中」(韓愈「監察御史元君妻京兆韋氏夫人墓誌銘」『韓昌黎文集校注』巻六)韓愈の文章は馬其昶校注、馬茂元整理『韓昌黎文集校注』(上海古籍出版社、1986)による。
- 瞿蛻園『劉禹錫集箋證』付録「劉禹錫集傳」、高志忠校注『劉禹錫詩編年校注』付録「劉禹錫年表」
- 「爲京兆韋尹賀雨止表」、「爲京兆韋尹賀祈晴獲應表」、「爲京兆韋尹謝許折糶表」、「爲京兆韋尹賀元日蠲雪表」、「爲京兆韋尹賀春雪表」(巻十三)

- 「爲京兆韋尹降誕日進衣狀」,「爲京兆韋尹進野豬狀」,「爲東都韋留守謝賜食狀」(卷十七)
- なお、最後の一篇は韋夏卿が東都留守に移ってからのものである。
- 10 瞿蛻園『劉禹錫集箋證』,付録二「劉禹錫交遊録」韋夏卿の條。
- 11 『劉禹錫集箋證』,付録二「劉禹錫交遊録」元稹の條。
- 12 卞孝萱『元稹年譜』(齊魯書社,1980)。元稹に関しては、この他、周相録『元稹年譜新編』(上海古籍出版社,2004)、冀勤点校『元稹集』(中華書局,1982)を参照。
- 13 注7前掲文参照。
- 14 「(貞元十九年)冬十月乙未,以太子賓客韋夏卿爲東都留守」(『舊唐書』卷十三,德宗本紀下)
- 15 「謝傳堂前音樂和,狗兒吹笛膽娘歌。花園欲盛千場飲,水閣初成百度過。醉摘櫻桃投小玉,懶梳叢鬢舞曹婆。再來門館唯相弔,風落秋池紅葉多」(「追昔遊」『元稹集』卷九)この詩は陳寅恪『元白詩箋證稿』第四章「豔詩及悼亡詩」,注12に挙げた二種の年譜ともに妻韋叢の亡くなった元和四年秋の作とする。
- 16 張賈については、「發華州留別張侍御」(卷二十八),「答張侍御賈喜再登科後自洛赴上都贈別」(外集卷五),「赴連州途經洛陽諸侯置酒相送張員外賈以詩見贈率爾酬之」(外集卷五),「赴連山途次晷宗山陵寄張員外」(外集卷八)の四首,李景儉については、「臥病聞常山旋師策勳有過王澤大洽因寄李六侍御」(卷二十三),「和六侍御文宣王廟釋奠作」(外集卷五)の二首,段平仲については、「揚州春夜,李端公益,張侍御登,段侍御平仲,密縣李少府暢,秘書張正字復元同會於水館,對酒聯句,追刻燭擊銅鉢故事,遲輒學航以飲之,逮夜艾,群公沾醉,紛然就枕,余偶獨醒,因題詩於段君枕上,以志其事」(卷二十四),「遙傷段右丞」(卷三十)の二首がある。
- 17 「王叔文最所重者,李景儉,呂溫。叔文用事時,景儉居喪於東都,呂溫使吐蕃,留半歲,叔文敗方歸」(『舊唐書』卷一三五),「貞元末,韋執誼,王叔文東宮用事,尤重之,待以管葛之才。叔文竊政,屬景儉居母喪,故不及從坐。韋夏卿留守東都,辟爲從事」(『舊唐書』卷一二一,李景儉傳)
- 18 「呂八見寄郡內書懷因而戲和」(外集卷五),「送李秀才還湖南因寄幕中親故兼簡衡州呂八郎中」(卷二十八),「哭呂衡州時予方謫居」(卷三十)
- 19 羅聯添編著『柳宗元事蹟繫年暨資料類編』(国立編訳館中華叢書編審委員会,1981)
- 20 「刺史一員,正四品下,別駕一人,從五品上,司馬一人,從六品下」
- 21 例えば、「武德元年六月,置別駕。貞觀二十三年七月五日,改別駕爲長史。上元二年十月十日,又置別駕,其長史如故。……至永紅元年,又廢。至永淳元年七月八日,復置別駕官。……天寶八載八月二十六日,勅,諸郡各置三官,別駕不煩功置。政存省要,豈在多員,其別駕隨缺便停,下州置長史一員。……」(『唐會要』卷六十九,別駕)
- 22 注20参照。
- 23 『白居易集箋校』卷十二,感傷四。
- 24 下定雅弘「白居易の感傷詩」(『帝塚山大学研究論集』第24集,1989)
- 25 劉禹錫の樂府詩については,齋藤茂「劉禹錫の樂府詩について」(『中國詩文論叢』第七集,1988)が詳しいが,民歌を取り上げた作品や土風に取材した作品が多いことが指摘されている。また,これらの作品は「南方の中央文化とは切り離された地域に身を置く中で,そこで見聞した京畿とは異質の風俗や現象を歌い伝えようとする姿勢から生まれてきた」。そして「柳宗元はもとより,韓愈,白居易,元稹,李德裕など,主要な詩人の多くは貶謫を経験しているが,劉禹錫ほどに土俗や俚歌に関心を寄せた詩人は他にない」と述べる。
- 26 「淮陰行」序文は以下の通り。「古有長干行,言三江之事悉矣。余嘗阻風淮陰,作淮陰行以裨樂府。」
- 「代靖安佳人怨」序文は以下の通り。「靖安,丞相武公居里名也。元和十一年六月,公將朝,夜漏未盡三刻,騎出里門,遇盜斃于牆下。初公爲郎,余爲御史,繇是有舊故。今守于遠服,賤不可以誄,又不得爲歌詩聲于楚挽。故代作佳人怨以裨于樂府云。」なお,「元和十一年」とあるのは「元和十年」の誤り。
- 27 『禮記』曾子問に「賤不誄貴」とあるのを踏まえている。
- 28 朱金城は「白居易交遊三考」で「劉禹錫,白居易貞元末同在長安,曾否過從,集中無明文可據」(『白居易研究』文史哲出版社,1992)と述べる。また,瞿蛻園も「二人之會合始於何時,猶待探討」(『劉禹錫交遊録』)と確定する証拠がないとしている。
- 29 劉禹錫に「翰林白二十二學士見寄一百篇,因以答賦」(外集卷一)という詩があり,白居易が翰林學士であったのは元和二年から六年にかけてであるので,その間に劉禹錫に贈ったことがわかるという。(『白居易交遊三考』)
- 30 卞孝萱『元稹年譜』,周相録『元稹年譜新編』参照。なお,李紳は元和元年の進士(『登科記考』卷十六)。
- 31 山内春夫「杜牧の「杜秋娘」詩について」(『杜牧の研究』所収,彙天堂書店,1985),齋藤茂「劉禹錫の樂府詩について」。
- 32 杜牧の作品の引用は,馮集梧注『樊川詩集注』(上海古籍出版社,1982)による。
- 33 その父李國貞について『舊唐書』は「李國貞,淮安王神通子淄川王孝同之曾孫」(卷一一二)と記す。
- 34 『舊唐書』卷一一二,『資治通鑑』卷二三七。
- 35 『舊唐書』卷一七五,穆宗五子列伝,『新唐書』卷八十二,十一宗諸子列伝。
- 36 山内春夫「杜牧の「杜秋娘」詩について」
- 37 山内春夫「杜牧の「杜秋娘」詩について」

(平成19年9月18日受理)